

## 2003年度海外研修生等助成事業研修報告

# 子供一人一人の個性を生かし、 将来につなげる教育制度の在り方を考える ～ドイツ 教育で育てる社会人～

伊豆市立大見小学校 鎌野 電子

「先生、ぼく大きくなったらね…」

目を輝かせて夢を語る子供達と毎日を過ごしながら思うのは、一人一人が違う子供達それぞれの個性や能力を育てることができる教育の在り方である。そのために、多様な価値観を認めるドイツの社会を支える教育制度を視察研修した。そこで、子供たちが生き生きと意欲的に学習に取り組み、それが生きていく力につながるために、子供達の適正な能力を発揮できるシステムを学ぶことができるだろう。また、子供達が、将来にわたって目標を持って生き生きと学び、働くことができるようにするために、日本の教育現場において必要な手だけが見つかるだろうと感じたからだ。

ドイツの初等・中等教育制度の大きな特徴は、中等教育の段階(小学校4年生終了後 10歳)で、生徒の能力・適性にに応じて、①義務教育を受ける基幹学校(ハウプトシューレ)、②専門技術も学ぶ中等実科、商科学校(レアルシューレ等)、③大学に行くための学校(ギムナジウム)の三種の学校に分かれる三分岐型学校制度を基本にしていることと、中等教育の後期段階で多種多様な職業教育が行われていることだ。将来の指針もなく大学に行くことも多い日本の学生と違い、たった10歳で進路を決定することに大きな驚きを感じた。

ドイツは、日本のように、就職してから育てる形態ではなく、企業と協力して、就職したらすぐ力となる人材を教育の中で育てているように思う。原則的に若い人は教育を受けないで職業につくとこ



生徒との交流～ケルンのレアルシューレにて～

はできない。たとえば、教師は、2年以上の教育実習期間を経るとのことだ。ドイツの二重(企業と国)職業選択システムは大きな成果をあげており、他の国もこの制度を学んでいるようだ。教育の場で持った子供の夢が将来にずっと繋がって、職業として実現していくことに感銘を受けた。

いろいろな問題はあるが、生徒が、いつも自分の将来を意識して学習していることはすばらしいことに思えた。学習が自分の将来に繋がっているので、苦労して学ぶ意味も、身をもって理解できるだろうし、実際に現場を体験できることにより、自分の将来を修正することも可能であろう。

子どもの個性を尊重するドイツの考え方のよいところを学び、子供が自分の生き方を学ぶことができる教育をめざしていくことができるよう、日本の教育現場でがんばりたいと思う。